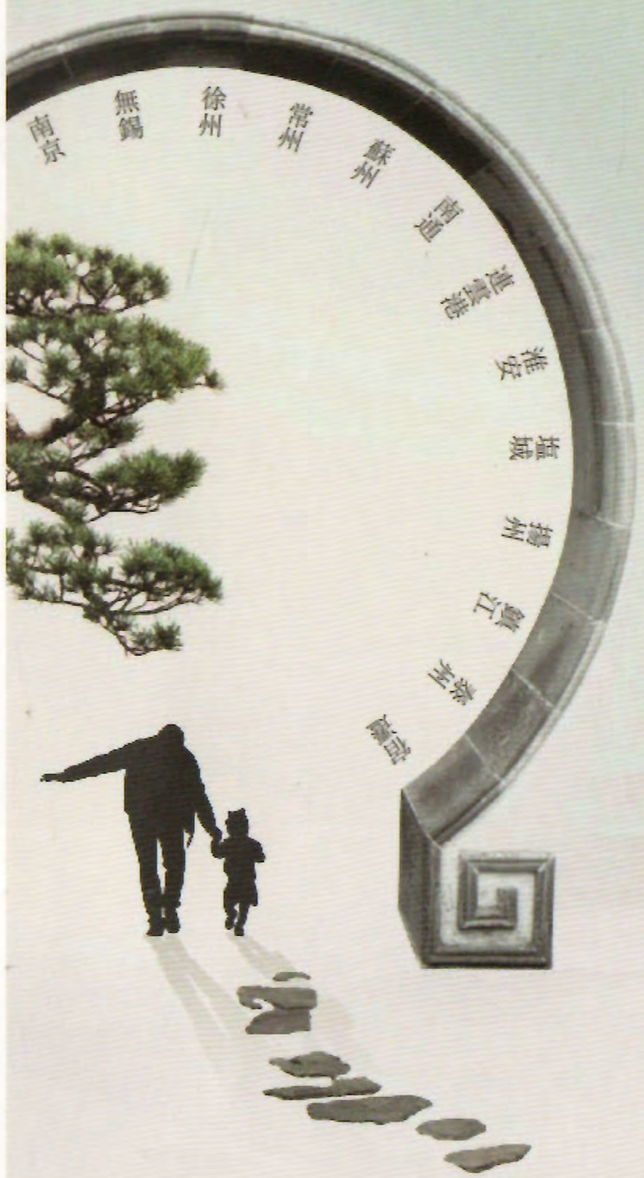
水の江蘇

タイムマシンで江蘇を遊覧する

もし、タイムマシンで過去の江蘇に戻ったら、そこにはどのような風景が広がっているのだろうか？どんな物を見て、どんな人に出会えるだろうか？



江蘇省文化・観光庁

タイムマシンで江蘇を遊覧する

目次

前書き

『時間の旅』

古代から現在までの建物

04 園林／拙政園

07 民家／甘家大院

10 古鎮／周荘古鎮

14 博物館／南通博物苑

永遠の自然の美

20 泰州興化千島菜の花

23 常州天目湖南山竹海

26 揚州瘦西湖

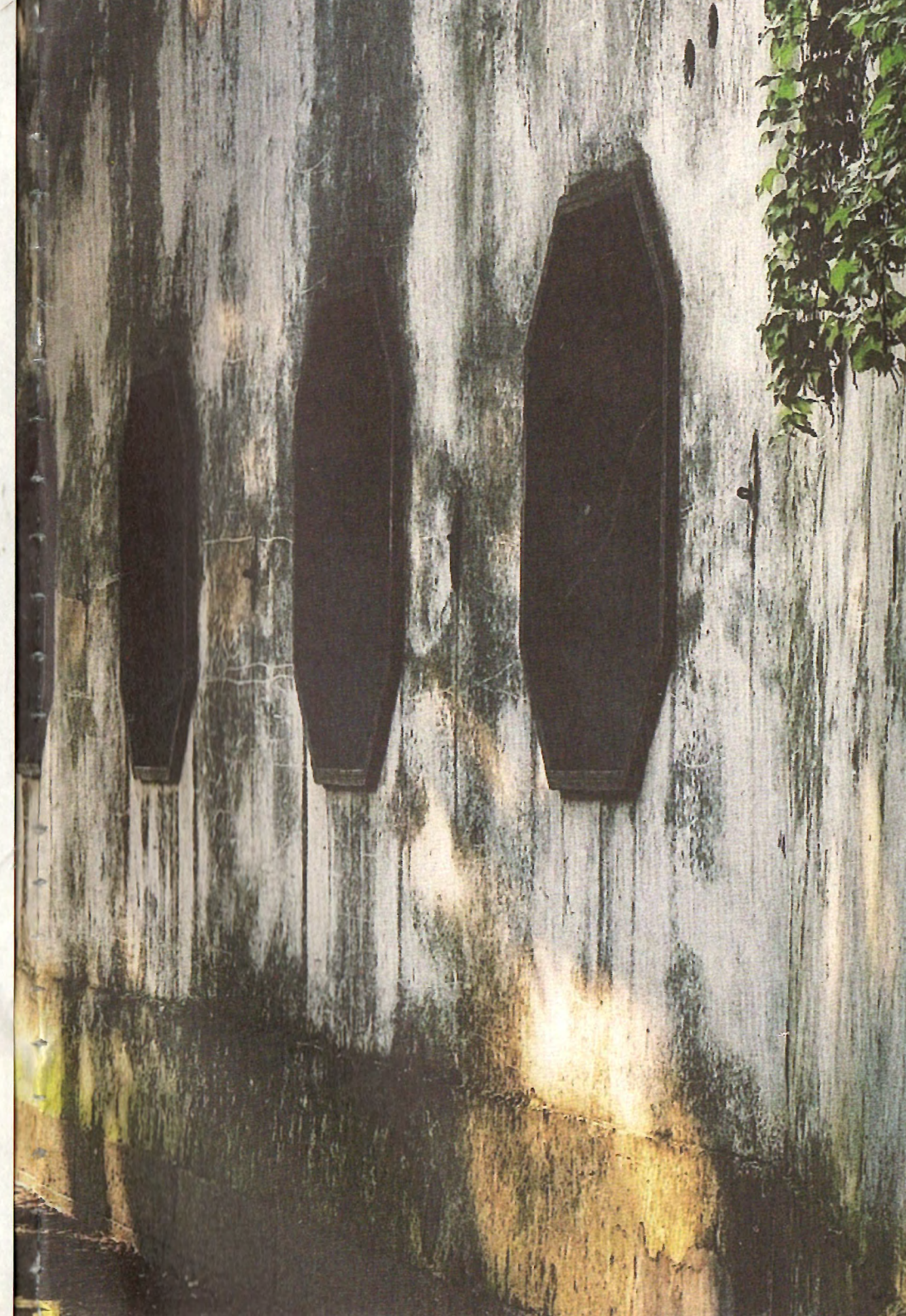
30 塩城タンチョウ&シフゾウ自然保護区

英雄と仙人の住居

34 宿遷項王故里

36 徐州漢文化風景区

38 鎮江金山



時間の旅

◎前書き

長い時間の軌道で、中国江蘇の歴史は早くも大昔の時代にさかのぼることができる。時間は文明を生み出し、それによって様々な時代に輝かしい盛況を呈し、その時人々に数え切れないほどの衝撃と驚きを与えた；時間は時代を超えた経典を保存し、貴重な文化遺産は後世の人々を誇りに思っている。

もし、タイムマシンで過去の江蘇に戻ったら、そこにはどのような風景が広がっているのだろうか？どんな物を見て、どんな人に出会えるだろうか？

どの時代にも、家は単に一つの建造物であるだけでなく、多くの人々が住まうところでもある。古い家はその時代を示すしるしであることもあり、ある家の日常生活を語っている。

四季の移り変わりは永遠の自然の美しさをあらわしている。たとえ過去にタイムスリップしても、自然の美は少しも目減りすることはない。春の花、夏の緑、秋の実、冬の雪は、人々が見尽くすことのできない美しい永遠の景色である。

エレクトロニクスの現代的なテクノロジーのまだなかった過去には、人々は多彩な生活を送っていた。食料は豊富であり、生活は情調に彩られ、文化があり、美食があり、うまい酒もあった。つまり、酒と料理でお腹を満たし、余暇にはさまざまな娯楽をいっぱいに詰め込み、琴を弾いたり、曲を聴いたり、芝居を見たり、灯篭を鑑賞する——美への憧れは、人々の本能であり、彼らは自分自身を飾る方法とその生活を飾る方法を知っているのだ。

過去に戻ると、当時の人々はロマンチックで情に満ちて、精神が豊かであることを発見することができる。劉邦、項羽は人々の王であり、人々が崇拝する英雄でもある；『白蛇伝』、『西遊記』は人々が興味津々に話す神話伝説である；神獣饕餮は古城南京の精神をあらわすトーテムである。

さあ、タイムマシンに乗って、温暖で面白い江蘇を見つけにいこう。

目次

前書き

『時間の旅』

04 園林／拙政園

07 民家／甘家大院

古代から現在までの建物

10 古鎮／周荘古鎮

14 博物館／南通博物苑

20 泰州興化千島菜の花

23 常州天目湖南山竹海

永遠の自然の美

26 揚州痩西湖

30 塩城タンチョウ&シフゾウ自然保護区

34 宿遷項王故里

36 徐州漢文化風景区

英雄と仙人の住居

38 鎮江金山

40 連雲港花果山

42 南京明孝陵

46 淮揚料理

50 揚州ヤムチャ

味蕾に触れる千年の味

52 鎮江香酢

54 宿遷美酒

58 古琴を聴く

60 昆曲を鑑賞する

一日中の閑情風情

62 揚州の人形劇を鑑賞する

64 秦淮飾り提灯を観賞する

67 衣装が華やかで美しい／南京雲錦　蘇州刺繍　南通藍染め布

70 烏髪の間の様々な風情／常州の櫛　南京の絨花

先祖からの贈り物

72 生活を彩る美しい器物／切り紙細工　無錫紫砂壺　徐州馬荘香包

40 連雲港花果山
42 南京明孝陵

味蕾に触れる千年の味

46 淮揚料理
50 揚州ヤムチャ
52 鎮江香酢
54 宿遷美酒

一日中の閑情風情

58 古琴を聴く
60 昆曲を鑑賞する
62 揚州の人形劇を鑑賞する
64 秦淮飾り提灯を観賞する

先祖からの贈り物

67 衣装が華やかで美しい／南京雲錦　蘇州刺繍　南通藍染め布
70 鳥髪の間の様々な風情／常州の櫛　南京の絨花
72 生活を彩る美しい器物／切り紙細工　無錫紫砂壺　徐州馬荘香包

◎第一章

古代から現在までの建物

古い建物には無言の歴史が宿る。それらは時代の当事者であり目撃者である。小さな世界では、蘇州園林は中国の山水画の優美な境地の観を呈している。また、九十九間半の甘家大院は人々に一軒の家の典型的な物語を伝える。数千年間を生き延びた水郷古鎮で、一群の人びとが最も普通な過去の日常生活を復刻している。しんと静まりかえった南通博物苑が見せるのは、ただの植物園が中国初の公共博物館へと変貌した歴史である。

繁華街の中の静かな山林

拙政園

拙政園は中国四大名園の一つであり、蘇州園林の第一の目玉である。西暦1509年、中国明代のある大臣が、当時有名な画家であった文征明を招いて庭園の設計をおこなった。文征明は画家の審美眼を発揮し、伝統的な筆致で拙政園のレイアウトを描き出した。淡々とした自然に近い拙政園は、中国の山水画の優美な境地を見事に表現しており、園林を訪れる人々は園の景色に夢中になり、知らないうちに絵の中の人になっている。

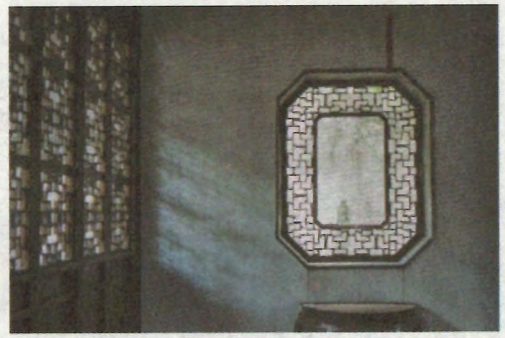
◎リンク／拙政園における「水」哲学

「水」を建築特徴とする拙政園は、最初は個人の庭園であり、主人は中国古代文人だった。庭園は彼らが繁華街で求めている静かな山林であり、精神の安らぐ理想的な家であった。

香洲：香洲は「舫」式構造で、水面に構築された船形建物である。園林の最初の主人は当時朝廷の大臣であったが、結局園林に隠居した。この香洲にも、かつての理想が込められていた。

小飛虹：これは園の中にある廊橋で、水面と陸地をつなぎ、橋を中心とした一角の独特な景観をつくり出している。朱色の橋の柵は水に映りこみ、波が澄みわたり、静かで幽玄な趣がある。

聴雨軒：「軒」は窓付きの廊下や小屋である。軒前には、水にハスが植えられ、軒後には、芭蕉や竹が植えられている。雨がそれぞれの植物に落ちる音は変化に富み、くわえて雨だれを聴く人びとの気持ちも異なるので、それぞれに情緒ある雨の音が生まれる。



◎攻略／拙政園の四季観賞ガイド

拙政園には主に3つの祝日がある。毎年春のツツジの祭り、夏のハスの祭り、秋の菊の祭りである。その中で特に夏のハスの祭りが最も有名であり、拙政園の植荷の歴史が長く、品種が数百種類にも達している。夏荷が咲き、涼風がそよそよ吹き、香りが遠くまき、ます清新な香りがする拙政園は、濃い夏の江南水郷の清涼感を醸し出した。今、真夏に拙政園の観荷に行くのも蘇州では「新民俗」となっている。

九十九間半

甘家大院

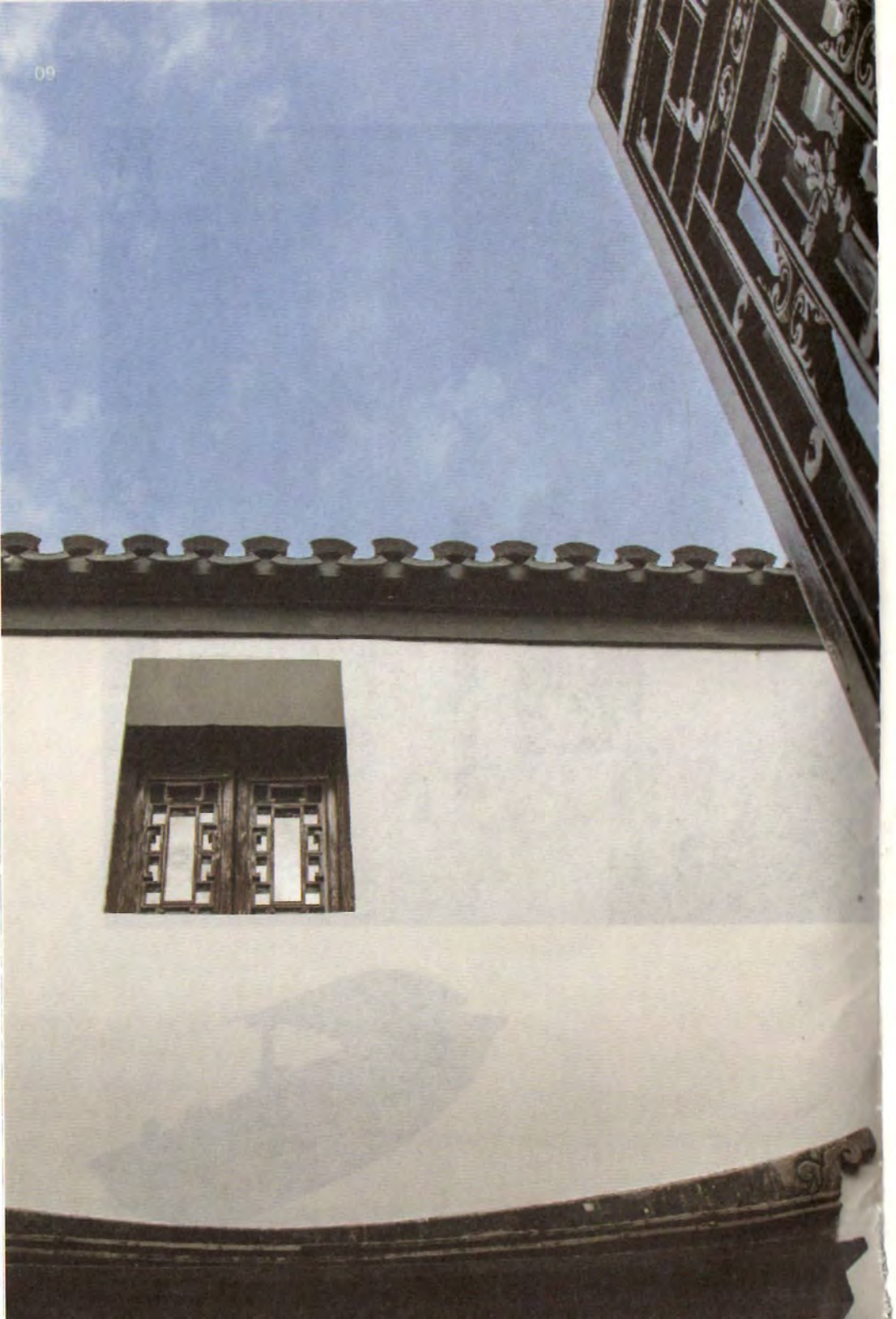
甘家大院は、甘熙宅第とも呼ばれ、中国最大の私邸である。甘氏は南京の名門であり、歴史上多くの著名人を輩出し、甘熙氏は中国晩清の著名な文人、蔵書家である。甘家大院は清朝の建築様式を今でも無傷で残しており、木窓や木戸、彫刻された模様には深い意味が込められている。粉壁黛瓦は、赤い提灯が飾られ、壁の外は高層ビルがそびえ立っている商店街であり、壁の内側では波も静かな奥まった庭である。あたかも二つの世界が隣り合っているかのようだ。

◎リンク／九十九間半の由来

甘家大院は南京では「九十九間半」とも呼ばれている。九は最大の陽数であり、吉数でもあり、九の次の十になると頂上であり、頂上は衰退を意味する。そのため、中国最大の建築である故宮は「九千九百九十九間半」と呼ばれ、最大の官署建築である孔府は「九百九十九間半」と呼ばれ、民家はせいぜい「九十九間半」にすぎない。この半間は、百間を達成していない謙虚さと同時に、半分のステップで目標を達成できる誇りを示している。

◎攻略／古代民家における博物館

甘家大院は現在南京市民俗博物館であり、これも中国初の民俗、無形文化遺産「双博館」でもあり、ここで百種類以上の無形文化遺産の技術を見ることができる。「金陵十八坊」展示ホールは、昔の南京地区の一部の住人や、古い商売を復元した。結婚民俗展示区では、若者たちはこの大きな家の庭を借り、庭の中の人とともに、中国式の結婚式を行う。また、泥人、切り紙細工、絨花、竹刻などの伝統的な手工芸もあり、無形文化遺産の継承者が現場でわざを披露し、観光客は現場で「芸を学ぶ」ことができ、無形文化遺産の魅力を味わうことができる。



昔の詩情豊かな生息地

周荘古鎮

水郷古鎮に惚れ込んだのは、中国文人墨客だけではない。900年前の周荘人もこの土地を深く愛していた。彼らは水に臨んで住み、水を枕に眠っていた。家々の石段まで水が伸び、水際で洗濯をしていた女もいたし、水煙が立ち込め、岸辺の石橋の狭い路地まで水の優しさがしみこんでいた。今日の人々はここに来て、桃源郷に迷い込んだように、目の前に平凡で独特な生活図が次々と再現され、時間の進み方が遅くなったかのように感じる。生活の美しさがここにはある。

◎リンク／古鎮の職人精神

古鎮にある「貞豊十二坊」には、中国の明清時代に栄えていた十二軒の手工業の工場が集まっている。つまり、鉄屋坊、木器坊、れんが坊、漢方薬坊、土布坊…時代の流れに忘れ去られたそれらの職人たちは、いずれも深く隠された達人で、器用で熟練した指先の生み出す伝統工芸を展示している。

竹編坊では、竹編職人が作ったバスケットがある。精妙な作りで、さまざまな形をしている。あらゆる種類の布地が掛けられている土布坊では、おばあさんとおじいさんが熟練的に分業している。おばあさんは糸を撚り、織り、おじいさんはハサミで切って、服を作り、繊維機械、シャトル、およびペダルの音が静かで小さなスペースに織り込まれている。

◎攻略／「周荘人」になる必須

「阿婆茶」を食べる

「阿婆茶」は周荘の大きな特色である。「食べる」と呼ぶのは、人々がお茶を飲むときに、様々なお菓子を組み合わせることが多いからだ。「お茶」を食べながら、古鎮の人々は世間話をし、お互いの心のうちを通わせ、郷人の情誼を深めた。

演出を見る

「四季周荘」は江南の文化を表現する水郷実景演出で、明代の初め、江南きっての金持ちである沈万三と美貌の陸麗娘の恋愛物語を語る。彼らは知り合い、恋をし、春夏秋冬を経て、ついに連理の契りを結ぶ。現代的な実景演出のほか、周荘の古い劇場では昆曲芸術の風貌を楽しむことができる。

老宅に宿る

古風で優雅な老宅はいつも人に心からのリラックスをもたらす。古鎮には異なるタイプの宿泊施設が集まっている。サービスの行き届いた快適なリゾートホテルは江南水郷の風情と融合し、その環境は幽玄で優雅である。水を枕にして住んでいるすばらしい宿屋は、静かで心地よく、水郷の生活の詩情と風情をじかに体験することができる。庶民の家をもとにした民宿には田舎の特色が隠されており、周荘淳朴郷を味わうのに最適な選択である。

中国初の公共博物館

南通博物苑

博物館は都市の目で、都市の歴史、都市の文化、都市人の生活はすべて静かにそこに横たわっている。1903年に南通の著名な実業家張謇が日本に行って実業と教育を視察し、東京帝室博物館を見学した後、彼は当時の政府に「中国は自分の博物館を持つべきだ」と提案した。2年後、張謇は自費で植物園を中国初の公共博物館、つまり現在歴史、芸術と自然科学を一体化した南通博物苑に改造した。

◎リンク／なぜ「苑」が「館」ではないのか？

なぜ南通博物館と呼ばないのか？「苑」とは「フェンスのない苑」のことである。百数十年前の南通博物苑には、様々な貴重な文化財が収蔵されていただけでなく、屋外では珍しい草花や噴水、築山などの園林景観が見られ、東北虎、チンパンジー、エミューのような珍しい動物も見られた。いずれも博物苑の展示内容であり、これほど洗練された雰囲気を「館」の字で要約し意味することはできない。このようなレイアウトも張謇氏が博物苑を創設した本来の目的を示しており、博物苑は学校教育を補助する施設でもあり、教育とレジャーが両立している。

◎攻略／南通博物苑見学ガイド

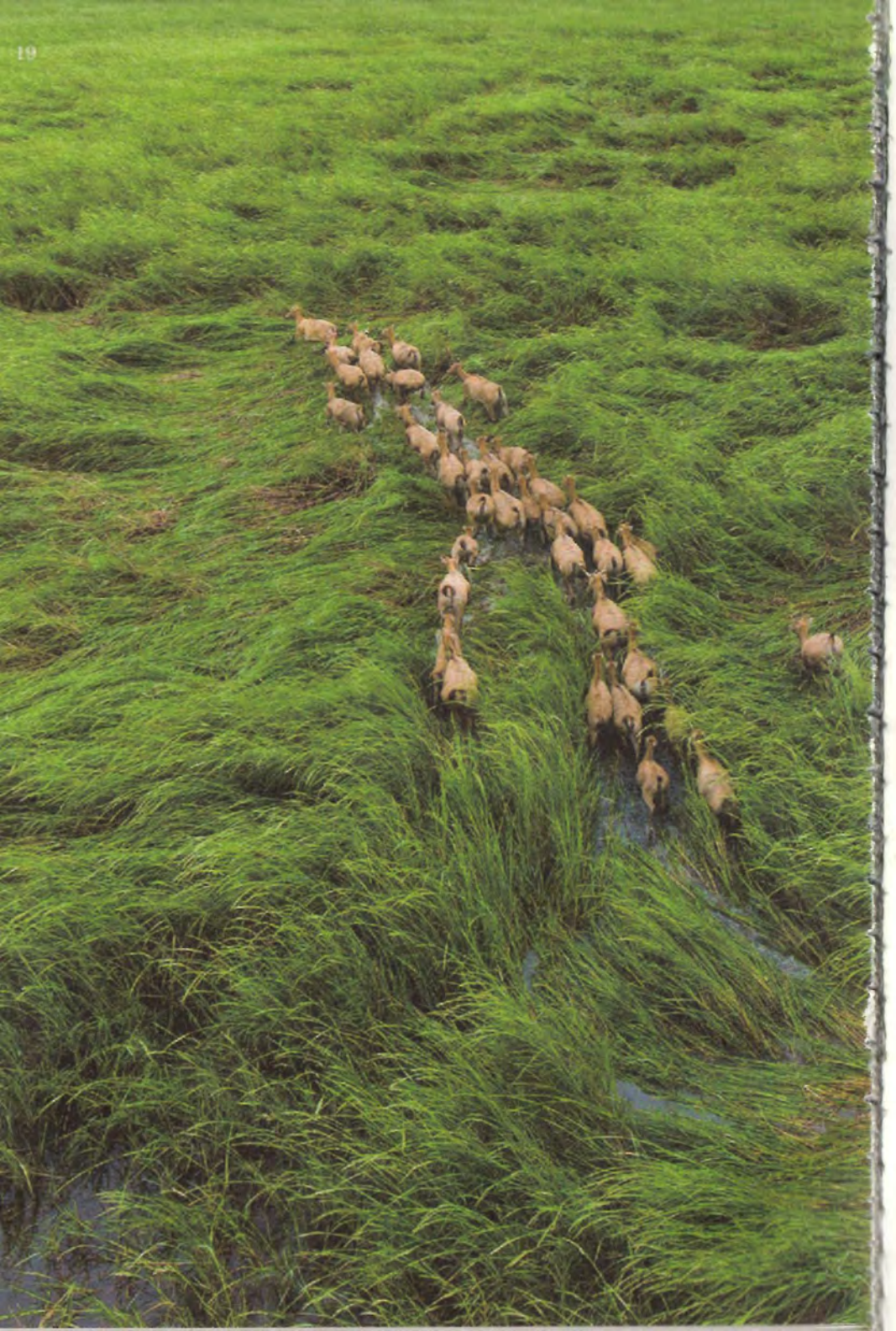
南通博物苑は百周年を迎えた際、原地に新しいバビリオンを拡張し、設計に南通独特の地域文化要素を融合し、現代の潮流審美と完璧に結合した。新館には現在収蔵品が約5万件があり、歴史文化財、民俗品と自然標本に分けられ、その中で南通地方の風土民情を反映した民俗品、百工器物はとても面白い。

文化財を見学する以外、博物苑は現在も体や心を鍛え、自然に親しみ、自然を学ぶ良い場所である。築山小亭、緑植石台構成されたミクロ庭園は、文化を自然に溶け込ませ、自然に文化を浸透させる。

◎第二章

永遠の自然の美

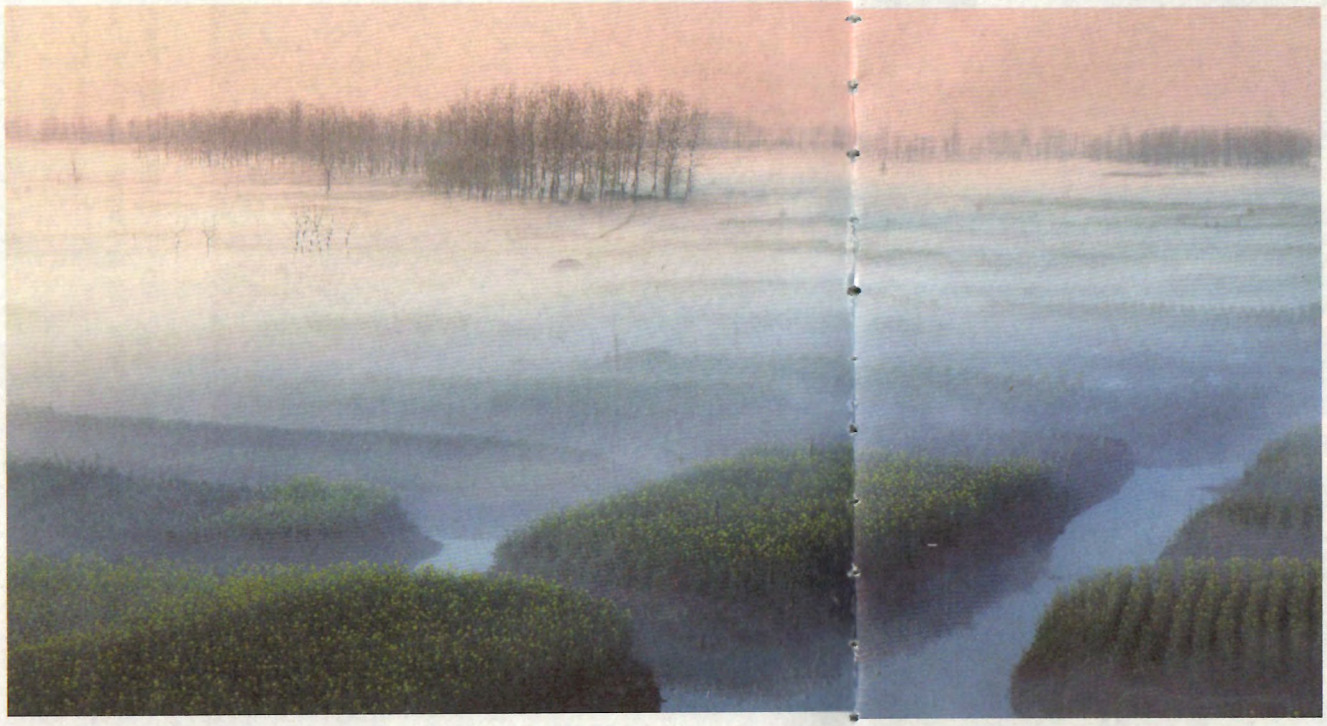
四季の輪廻、季節の移り変わり、万物は自然の基準を守って、時計のように順番に進んでいる。時計が動く方向に沿って、美妙な風景を鑑賞し、時間が自然に与えられる永遠の美しさを感じる。人々は春に縦横に交錯する水田菜の花に酔う；夏に蒼然とした南山の竹海に入って、そよ風の中で竹の葉の間の摩擦の音を聞く；秋雨の後の瘦西湖では、ぼんやりとした優美な江南の美しさを感じる；冬の雪の後、タンチョウとシフゾウの家では、粉飾のない純粋で神秘的な美しさに感動した。



水上に浮かぶ花海迷路

興化千島菜の花

春は、泰州で一番美しい時である。暖かい春風は、冬に眠る興化の垛田を目覚めさせ、鮮やかな春の衣装をまとった。縦横に交錯している垛田は、目いっぱいの黄金色が足元から空まで伸びている。船娘の櫓をこげる船に乗り、何百何千枚もの菜の花の垛田の間を行き来して、花の香りが水面に漂っていて、顔には濃い春気が漂っている。



◎リンク／垛田の知恵と文化

「水の江蘇」は、江蘇は古くから名実ともに水郷である。水が多く、耕作地が少なくなり、興化の先民は沼地に溝を掘って土を取り、徐々に耕作できる農地に積んでいった。密度の高い垛田の互いの間には、空間が狭く、牛と犂は、ここでは何の役にも立たず、耕作はすべて人工であって、船に頼るしかない。この荒灘を改造した水上奇観は「中国国家名刺」に選ばれただけでなく、国連も世界的に重要な農業文化システムに選ばれた。

◎攻略／興化千島菜の花祭り

千島菜の花の景観は世界で有名で、フランスのラベンダー荘園、オランダのチューリップ花海、京都の桜と並び、世界の四つの花海と呼ばれている。毎年四月初めに菜の花が咲き始め、年に一度の菜の花祭りが相次いでいる。

朝間花海

朝一番早く入園した花見客は、一日の中で最も静かで平和な景色を楽しむことができる。積み上げられた垛田の歩道で露玉を持った菜の花を感じることができ、水上の霧が立ち上り、煙霧が広がって、船娘が舟の水面に浮かんで、まるで絵の中に入った幻想的な光景のようだ。

カラフルな花事

観光地の高さ20メートルの展望台に登って、菜の花のパノラマを楽しむことができ、写真を撮るのに最適な角度でもある。菜の花鑑賞の合間には、地方の特色ある戯曲も楽しめ、水車を踏むという田野の趣味を体験することもできる。

夏の秘境／常州天目湖南山竹海

天目湖南山竹海は夏の江蘇の秘境であり、涼風がそよそよ吹き、小川の水がサラサラ流れ、竹林の濃緑、夏のロマンチックさと穏やかさといっても過言ではない。ここは山々が囲まれて、山々が重なり合っている；湖の緑水面の光に映えた波が清らかである。曲がりくねった竹の海は、広々とした山の中に伸び、大空を覆い太陽を遮る竹の海に身を置き、自然に戻る美しさと快適さを与えてくれた。

◎リンク／天目湖竹文化

竹は高くまっすぐにそびえ立ち、四季が青々としており、中国人に愛されている。中国の文人墨客は竹の中空、まっすぐさなどの特徴を人格化した上品さ、節行、謙虚さなどの精神的特徴に与えている。このような自然の背景と文化の雰囲気の中で、竹につながる一連の文化産物が生まれた。その中で「留青竹刻」が最も有名であり、それは無地の浅浮き彫り芸術品で、竹の皮(青)に図文字を残し、その残りの部分をすくう地色にする。書画、彫刻など多くの芸術の結合は、常州留青竹刻が中国工芸芸術品の行列の中で非常に重要な地位を占めています。

◎攻略／竹林山水間のカラフルな世界

竹海の全行程を歩いて踏破するのは難しいので、竹海全体には様々な交通網が張り巡らされ、観光客の便利を図っている。例えば、地上小型電車、地上ケーブルカー、高空ロープウェー、水上の竹いかだなどである。

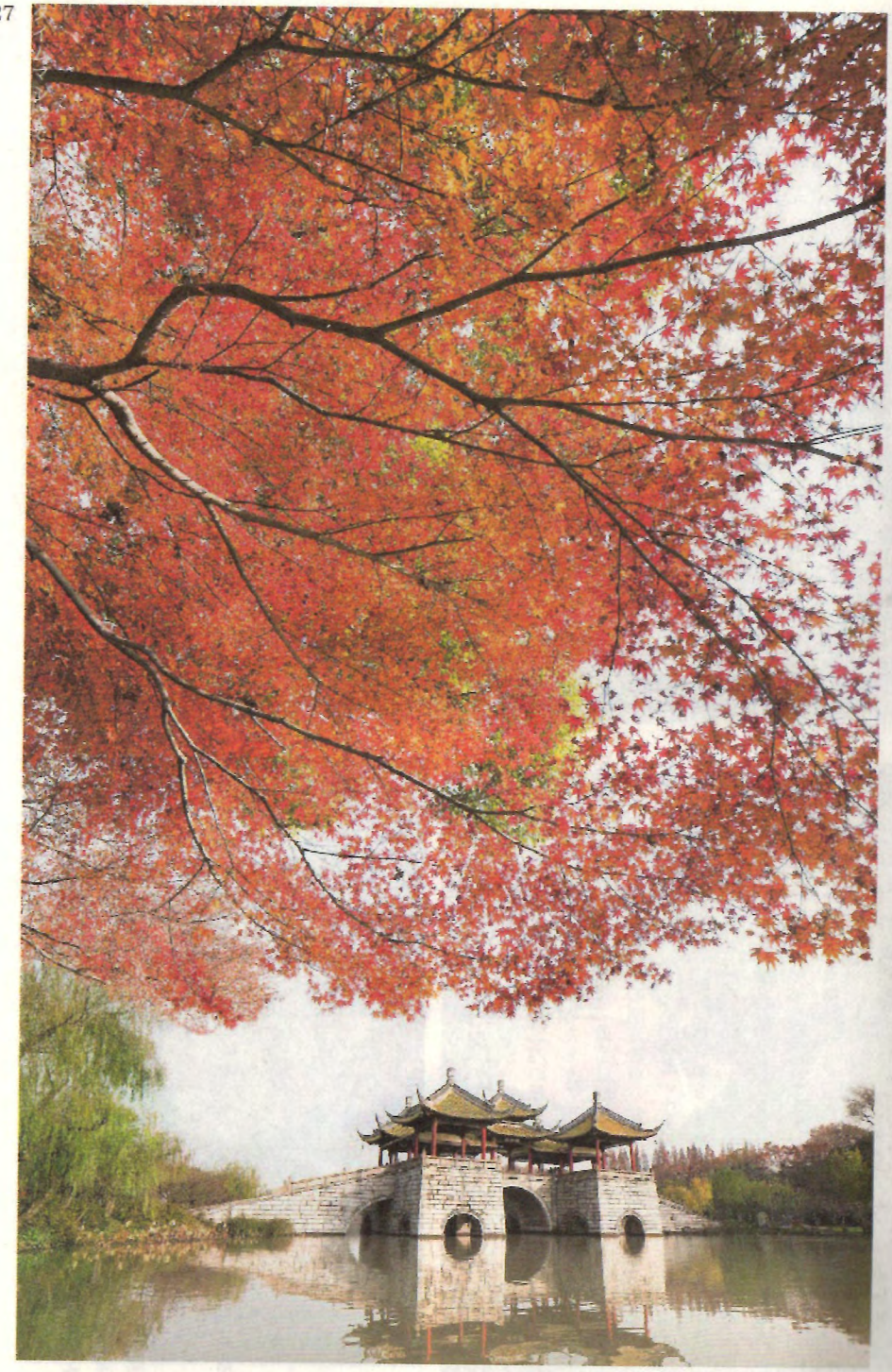
観光地全体をみてまわり、「静湖」を歩いて遊覧することができ、「小鳥天国」ではすばらしい鳥の演技を楽しむことができる。桟道に沿って「中国竹彫刻精品芸術館」に着くと、館内には数多くの優れた竹彫刻芸術品が収蔵されている。

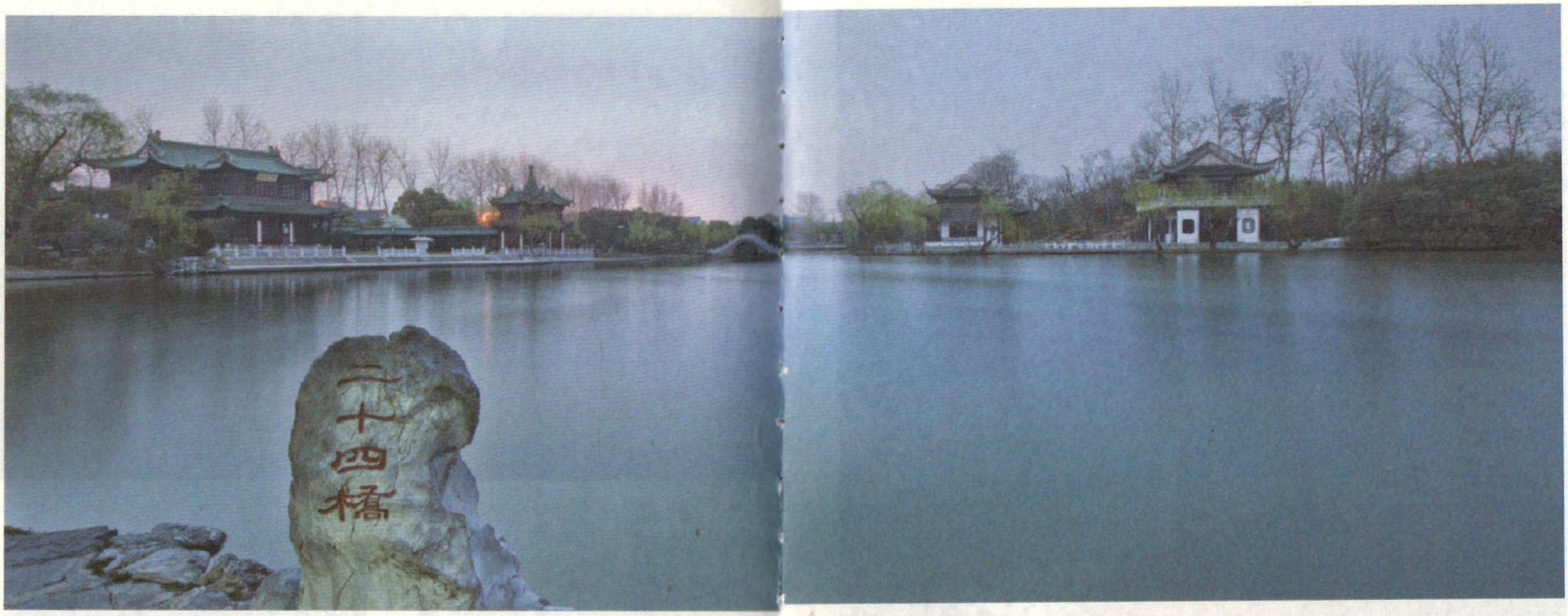
観光地区の地上ケーブルカーに乗って竹海を行き来し、南山竹海の歴史文化区に着き、「鶏鳴村」を観光し、明清時期の祠堂と中庭、古代兵舎の崩れ落ちた建物、豊かな民俗風味を体験する。「パンダ館」では、パンダの華麗と星安のすぐそばまで近づくことができ、パンダと交流できる。

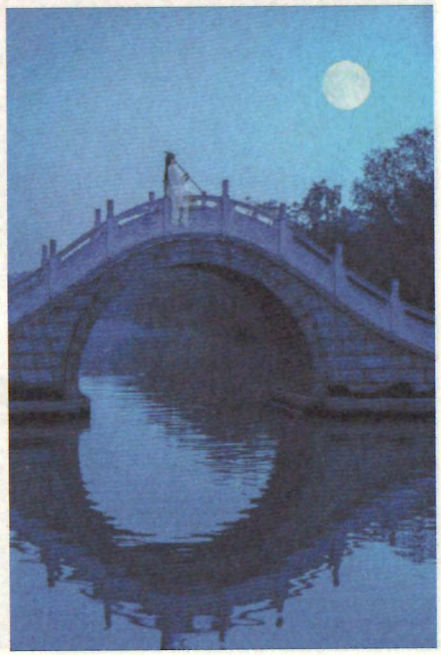
秋韻

揚州瘦西湖

春の揚州の花は入り乱れて咲き競うが、秋の揚州は一篇の叙情詩のようであり、そこにはより深い意味合いがこめられている。早秋のハス池へ行くと、ハスの花の匂いをまだ感じることができるが、池はすでに蓮花の名残しか残っていない。それは寒々とした光景ではなく、我々の人生と響き合う風景である。明清時代、揚州一の金持ちの塩業大手たちは外堀に邸宅と水上庭園を建設した。瘦西湖は揚州城で最も美しい景色であるだけでなく、秋を観賞する最良の場所でもある。長堤春柳、徐園、小金山、蓮花橋、白塔晴雲、二十四橋などの景観が次々と現れ、自然が描いた水墨画が目の前に徐々に広がっていくかのようである。

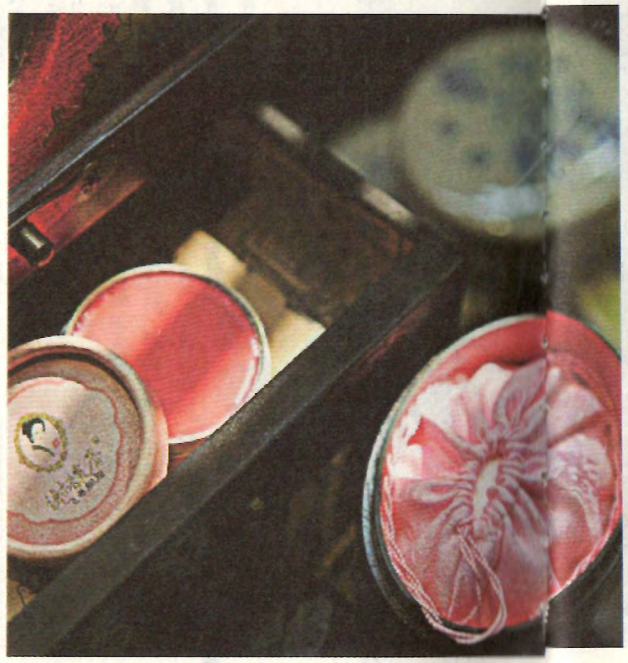






◎リンク／明月の夜の「二十四橋」

「二十四橋」は痩西湖観光地区内の単孔アーチ橋である。中国古代には、多くの文人墨客と学者たちがこの橋を愛し、美しい江南の風景に魅了された。月明の夜、簫笛は抑揚に富んで、詩人は感慨深げに詩を詠み、「二十四橋の明月の夜、美しいあなたはどこで笛の吹き方を教えているのだろうか」という古代の書がある。「二十四橋」の名前の由来は、橋の長さが24メートル、幅が2.4メートル、階段が24段で、その柱も24本という興味深い数字の組み合わせが関係している。秋の夜の痩西湖は、「二分明月」と呼ばれる。水辺に近い楼台にちょうちんをつるし、色絹を飾る。月の光の中で、堤防沿いのしだれ柳がそっと水をなでる姿はなまめかしい。



◎攻略／痩西湖の無形文化遺産

痩西湖の風景は見ても見尽くせないほど豊かで物語があり、文化がある。痩西湖の文化園は揚州の無形文化遺産を展示している。例えば揚州刺繍、切り紙細工、漆器、おしろいなどが収集されている。精巧な作品の陳列と、職人が自らお手本を示す実演の二つの展示形式の組み合わせによって、独特な揚州無形文化遺産を表している。

磨きぬかれた技術をもって作られる無形文化遺産の手工芸品の背後には、信念ある魂が隠れている。最も貴重で、かけがえのない無形文化遺産の文化は、美しい景色の痩西湖とあいまって、より温かみをもち、人の心に訴えかける。

魔法動物の王国

塩城黄(渤)海渡り鳥の生息地

江蘇は765キロの海岸線を持ち、塩城湿地は582キロに及ぶ。延々と続く海岸線には、二つの国家級自然保護区――国家珍鳥自然保護区、中華シフゾウ園が分布し、湿地の神聖さと平穏さを共に育んでいる。冬になると、珍鳥保護区は北東アジアからオーストラリアへ向かう渡り鳥の移動ルートにおける重要な停車駅になり、タンチョウなど百万羽の珍しい渡り鳥がここに滞在する。シフゾウ園では、シフゾウたちがそれぞれ干潟で追いかけっこをしている。鹿の鳴き声と鶴の舞は、調和と和やかさを表している。

◎リンク／「神鹿鶴」と湿地の調和共生

中国の民間伝説ではタンチョウは常に仙人とセットなので、「仙鶴」とも呼ばれている。シフゾウは中国の神話上の著名な人物である姜子牙の乗りものである。神話の伝説だけでなく、多くの美しい物語が現実にこの湿地で繰り広げされている。彼ら（シフゾウとタンチョウ）に最適な湿地環境を作るために、ある人は湿地の開発を断念し、たつきを立てるために故郷を離れ、ある人は自分の命を犠牲にした。しかし、物語は最終的に完璧な結末を迎え、当初39匹だったシフゾウは繁殖に成功し、子孫はすでに1600匹を超え、毎年越冬するタンチョウは千余羽に達し、湿地は2019年に国連によって「世界自然遺産」に登録された。

◎攻略／鶴神鹿奇遇記

えさやり

人工飼育しているタンチョウとシフゾウにえさやりができる。ニンジンはシフゾウのお気に入りだ。タンチョウは雑食動物で、餌としては穀物が一般的である。

「鹿王」の覇権試合を見る

毎年5月末から10月にかけ、雄鹿の間で激しい闘争が起こる。彼らは、雌鹿との交配権をめぐって争うのである。この方法によって、最も優れた遺伝子が受け継がれることになる。

タンチョウを飛ばすショー

観光地区のスタッフは毎日観光客のためにタンチョウを飛ばし、人工飼育中のタンチョウの飛翔能力を育成する一方、タンチョウの飛翔の美しさを観光客に披露することによって、観光客の動物愛護精神を涵養し、自然を守る理念を育成する。

◎第三章

英雄と仙人の住居

それぞれの時代には英雄の不朽の伝説があり、歴史の流れの中で輝き、時代を特徴づける独特な標識になっている。楚漢の争い、劉邦と項羽は人々の王であり、人々の心の中で崇拝されてきた英雄でもある。白蛇と人の物語の結末は悲愴であるにもかかわらず、耽美な愛への憧れを抱かせる。花果山で生まれた孫悟空は無数の少年から崇拝の対象となっている。古老であり勇猛な神獣貔貅は古城南京の千百年以来の精神的トーテムになっている。

西楚雄風

宿遷項王故里

中国の古代の英雄は、勝利か敗北かによってその人生を論じられていたが、無数の英雄は功績が未完成で、ついには歳月の埃に埋もれることになった。しかし、なかには例外的にこのルールを凌駕し、敗戦して死んでなお、後世の人々の尊敬を勝ち取る者がいる。それが項羽である。項王故里は宿遷梧桐巷に位置し、項羽少年はここで志を抱き、戦地で敵を打ち破って名を挙げる。高々とそびえる西楚の城楼は昔日の栄華をしのばせる。一歩一景、千年という時を超えて、項羽の一生の伝説を記述する幕がゆっくりと開いていくような心持ちになる。

◎リンク／戦神項羽の伝説

中国のさまざまな時代の歴史家たちは揃って、項羽の人並み外れた軍事的才能を称賛している。

怪力の持ち主で、背が高く勇敢である。若い時分項羽は、3、4人の兵士が力を合わせても動かない千キログラムの巨大な鼎につかみかかると、幾度かの挙げたり、下ろしたりことができて、ついにそれを持ちあげ、一躍有名になった。

彼は一人で敵百人を相手にするほどの勇猛さの持ち主である。巨鹿の戦いで、項羽は二万の兵力で劉邦の四十万の大軍に対抗し、故郷に凱旋した。これは中国古代の歴史上、数的不利を覆した戦いのうちで最も有名な戦いである。

知略に富み、兵を使うこと神のごとしである。自軍の数倍の兵力を誇る敵軍に立ち向かい、項羽は卓越した知恵と優れた軍事的才能によって敵軍の意表を突き、何度も勝利をおさめた。

◎攻略／西楚に戻る

「項羽伝説」と「虞姫伝説」は後世に語り継がれ、人々は極めて高い威厳と、並外れた勇敢さを持ち、誰にも及ばない愛情と義侠心を兼ね備えた世界的な英雄を認識する。項王故里はこれらの伝説をひとつに結合し、西楚文化の立体的な相貌を観光客に呈示する。

開城式

太鼓の音が鳴り、門が大きく開き、武士たちが飛び跳ね、旗を振って威声を上げる。その後、「項羽」は「虞姫」と手をつないで現れ、美酒をふるまい、各方面からの友人を歓迎し、観光地区に案内する。

楚服秀

華麗な楚服、踊る姿の美しい楚国美人、西楚時代の歌舞礼楽を間近に感じ、楚漢貴族の宮廷のごちそうを楽しむ。

項府家宴

千年にわたる項府家宴は項羽が挙兵して勝利をおさめ、諸侯を招待する大宴会である。どの料理にも豊かな文化的な意味が与えられ、その背景には素晴らしい物語がある。

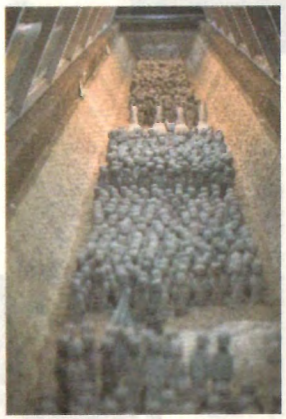
璀璨な両漢文化
／徐州漢文化風景区

紀元前202年、楚漢の紛争が終局を迎える。垓下の戦いで劉邦は最終的な勝利を勝ち取り、大漢王朝を確立した。不滅の漢文化が誕生し、繁栄した。長い歴史の中で、漢文化は中国の伝統文化のあらゆる側面に染み込んでおり、交流と統合を経験し、徐州の漢文化の本質を凝集するしている。その例として、漢の墓、漢の兵馬俑、漢の画像石などが挙げられる。

◎リンク／小さな兵馬俑

「漢王朝の3つの絶妙品」のひとつである漢の兵馬俑は、中国西安の秦の兵馬俑とは全く異なっている。漢の兵馬俑の仕様はほとんど60cm未満であるが、バラエティに富み、外観はより繊細で、形と表情が豊かである。表情が隠された不撓不屈の兵隊が並ぶ秦の兵馬俑と比較して、漢の兵馬俑の兵たちの表情は柔らかく謙虚で、眉に強い生命感がある。職人たちはこれらのポケットサイズの陶製の人形に命を吹き込む。ただ人形というものだけでなく、漢代の都市生活、葬儀システム、軍事戦についても知ることができる。

◎攻略／漢文化へ遡る



楚王の墓

獅子山にある楚王の墓は、西漢王朝の第三王である劉戊の墓であり、岩の中にすっぽりと建てられている。独特な形状で、非常に大きく、巨大な崖に作られた珍しい墓である。

漢の兵馬俑博物館

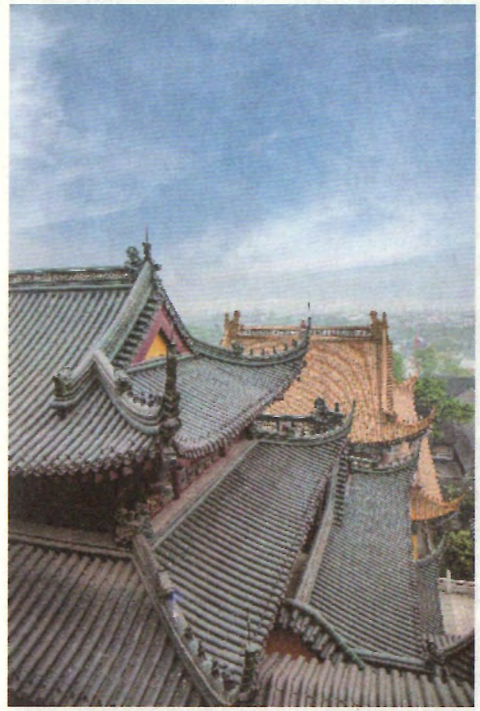
六本の兵馬俑より大きな地下軍事配列を構成し、歩兵、戦車、騎兵、馬など、さまざまな種類の陶製の人形が5000種類を超える。北側には、中国で唯一の水中兵馬俑博物館があり、漢の兵馬俑博物館と共に、2000年以上前に発達した軍事、経済、技術の奇跡を展示している。

漢の画像石廊

漢の画像石は、地下の墓や漢王朝の敷居などの建物に肖像画を彫るための建築石である。これは漢王朝の人が常に生命の神秘を追求することに関係しており、人々は石に人生のさまざまな場面を刻み、人生が石のように永遠に続くことを望んでいる。訪問者は、漢王朝の石の彫刻、石摺りの制作、印鑑の彫刻などを体験することができる。

都市にある神話の夢／鎮江金山

「三山」と総称される鎮江の金山、焦山、北固山は、この都市の観光と文化の本質である。金山は三山のうち最も有名であり、もともとは長江の小さな島だったが、その詩的な風景で「江心にある蓮の花」という名声を獲得している。しかし、単にその外観の美しさではなく、本当の魅力はその物語にある。『白蛇伝』では、人と蛇の間の愛がここで上演され、千年の古代都市にいくつかの伝説を加えている。



◎リンク／永遠の『白蛇伝』

『白蛇伝』は中国文学史に多くのバージョンがあるが、鎮江でポピュラーな白蛇の伝説は、中国人に最も親しまれているものである。物語の主人公は今でも何千年もの間修行をしている白蛇であり、彼女は人の暮らしを憧れ、悪人を恐れず、大胆な愛を追究している。法海が彼女の幸せな結婚を解消しようとしたとき、彼女は危険をものともせず、東海の水を引いて、金山を水浸しにする。それぞれのバージョンによって物語の結末は悲しいものであったりするが、いずれも人々のより良い生活への希望と勇気を表している。

◎攻略／金山寺遊覧

『白蛇伝』を除いて、金山寺自体も有名な仏教聖地である。中国の清王朝時代に、普陀寺、文殊寺、大明寺と共に中国の4つの有名な寺院と称された。

慈寿塔

慈寿塔は山の頂上に立っており、視覚的に壮大である。山を登って祈り、川と空の美しさをご覧ください。

留雲亭

留雲亭はまた「江天一覧亭」と呼ばれる。亭の中にある石碑に「江天一覧」としるされているが、これは康熙帝が来た時に書いた字である。

法海洞

徳の高い法海は『白蛇伝』では頑固で意地の悪いキャラクターとして描かれているが、事実は異なる。慈寿塔の北西にある天然石の洞窟「法海洞」は、史実在の人物であり金山寺の開祖である法海が修行をした地である。

西遊の仙境
／連雲港花果山

「海州」は連雲港の古称であり、このアルカイックな称号はロマンチックな都市の雰囲気を容易に想起させる。——広い海、古い岩画、きれいな水晶、及び神路、徐福東渡などの無数の美しい伝説である。伝説によると、1564年の秋に、古代中国の作家呉承恩がここを訪れ、高い山が霧で囲まれる風景を目にして「本当に花果仙山だ」と感じ、『西遊記』のインスピレーションを得たとされる。

◎リンク／西遊文化

『西遊記』は中国の四大名著の一つであり、その主人公の鮮明な形象は、深い精神的な意味を持っている。唐僧と弟子は「衆生の幸福」のために西天に行った。「経書を取得する」ことは忍耐の精神を表し、「衆生の幸福」は人類のために冒険する偉大且つ正義の事業である。孫悟空は花果山を制覇するという野望を放棄し、猪八戒は高老荘の快適な生活圏を放棄し、沙悟浄は個人の束縛を取り除き、個人の自由の追求を超えて、「衆生のため」生きることにより高い価値を見出した。『西遊記』の芸術的魅力と深遠な文化的意味は、無数の読者に感染し、発祥地である連雲港に大きな影響を与えた。

◎攻略／仙境花果山への遊覧

現実の花果山は連雲港の郊外にあり、雲台山系に属し、『西遊記』の中の多くのシーンはほとんどここを舞台にしている。

山を登って雲海仙境への遊覧

花果山玉女峰は江蘇省における最高峰である。山を登る途中、薄霧が糸のようにたちこめて、花果山全体をその中に覆う。山は隠れたり現れたり、あたかも蜃気楼のようである。

「斉天大圣」の洞口への探索

花果山には大きい洞窟も小さな洞窟も数え切れないほどあり、『西遊記』に描かれた「七十二の洞窟」のようである。各洞窟には妖怪が隠れており、悪事を働いている。最も有名な洞窟は「水簾洞」である。水流は天から下へ落ち、曇って、雷のようで、人々は物語に描かれた「水簾洞」の中に入って見てみようと試みる。

猿苑で猿を探す趣

花果山には沢山の野生の猿がいる。主に玉女峰、水簾洞と猿苑に分布しており、山頂に座ったり、木によじ登ったりと、とても賢い。

古い神獣／南京明孝陵

中国の悠久な伝統文化において、神獣文化はその重要な構成部分である。数千年の歴史をとおして、神獣は人々の憧れと信仰を引き受け、祝福、保護、魔除けといった神聖な使命を担っている。古代中国では、皇帝または王子が通常、石彫刻の神獣によって地所を保護しているが、なかでも有名なのは南京の明孝陵である。厳粛で厳かな神獣の石彫刻は、何世紀にも及ぶ歴史の盛衰を目撃し、後世の人々に静かに変遷の歴史を伝えている。

◎リンク／陵墓の守護神

中国古代には複雑な制度と礼儀作法があり、高貴な皇帝と官僚と貴族は、自身の豊かなアイデンティティを後世に知らしめ、安息の地が常に平和であることを望んだ。彼らは死が訪れる前に自分の陵墓の建設計画を立て、陵墓の前の「神道」を設計する。職人は堅い石を素材にそれぞれ対応する獣を彫るが、象、馬、魔除けの人形や、キリンなどが多い。厳粛で厳かな形象が神道の守護神になった。

◎攻略／明孝陵 神道への探索

明孝陵は朱元章皇帝と皇后の埋葬地であり、中国最大の皇陵の一つであり、国連の世界文化遺産にも登録されている。600メートルの神道は曲がりくねり静かで厳かであり、明孝陵で最もユニークな景色になっている。

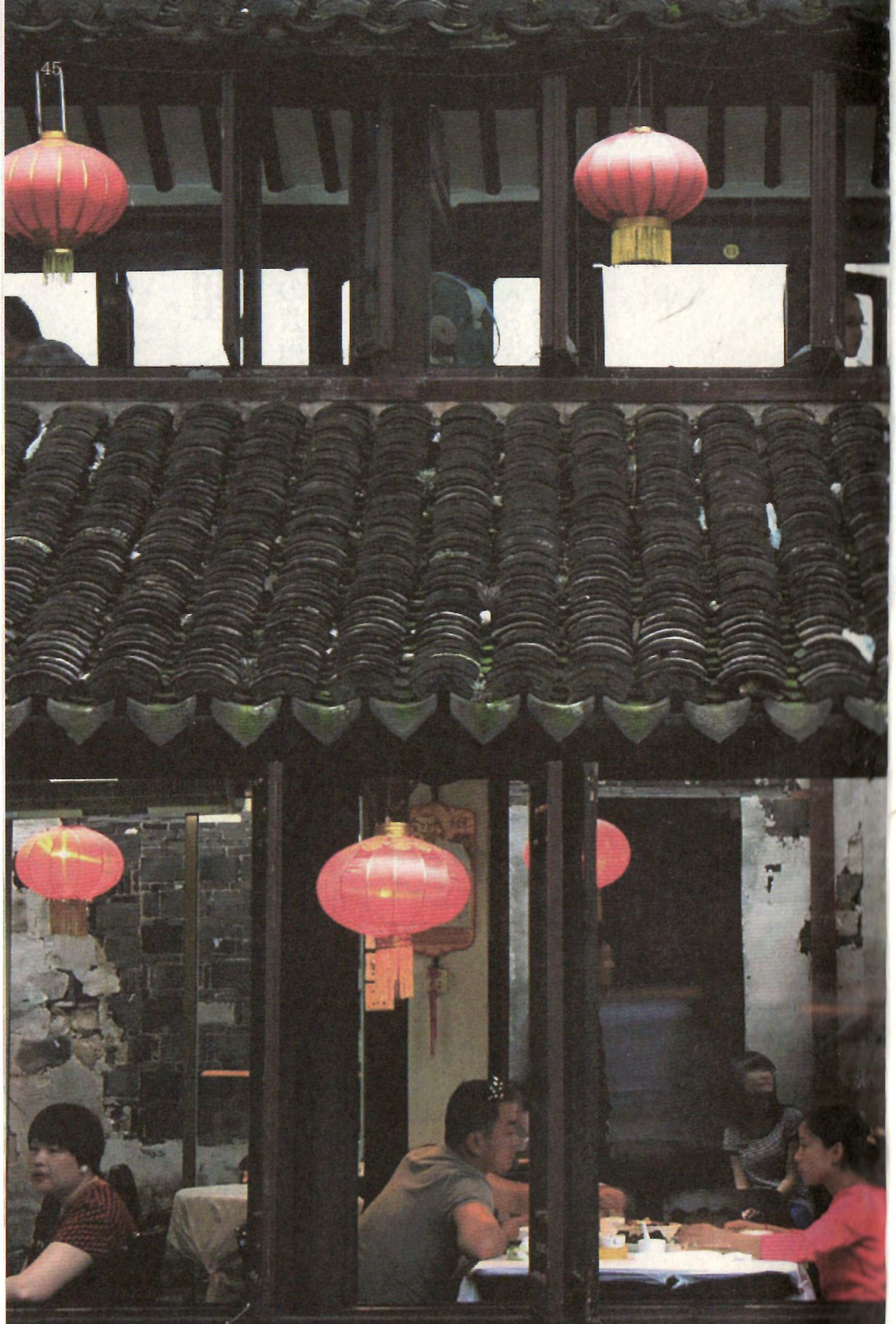
神道の両側には6組の石獣が順に配されている。それぞれ一対であり、獅子、獬豸（カイチ）、ラクダ、象、キリン、馬である。それぞれの石獣はおのおのが王室の礼儀作法を表している。獅子は獣の王であり、皇帝の威厳を表している。獬豸は、忠誠心を持ち、善悪を区別する。ラクダは砂漠と熱帯の象徴であり、明王朝の領土が広大であることを示している。象の4本の足は堅実であり、帝国の力が安定していることを示している。キリンは「慈悲と正義の君主」と光と縁起の良さを象徴している。馬は、皇帝が各地戦争を行い、国を統一するための重要な基盤である。

神道の最も美しい瞬間は晩秋で、アオギリの木の茶色がかった黄色、ガジュマルの木の赤、イチョウの輝きの黄色。両側の神聖な石像に見守られながらこの長くない神道を歩き、秋を鑑賞する人は絵画の風景になっている。

◎第四章

味蕾に触れる千年の味

時間とは、食物という名の贈り物である。食材は時の流れにしたがって、かまどの炎が燃えるようにさまざまに変化し、無限の風味が生まれる。時代の刻印は食物に保存される。名高い揚州料理には、江南の詩意が溢れている。揚州ヤムチャは、百年前から変わらない都市の味で世界に良い朝を与える。酢とお酒は歳月の推移に耐え、依然として食卓に並んでいる。高級料理でも、普通の家庭料理でも、時間によって洗練された江蘇の味わいは、注意深く食事をする人であれば誰であれ心を打たれる、究めがたい余韻をもっている。



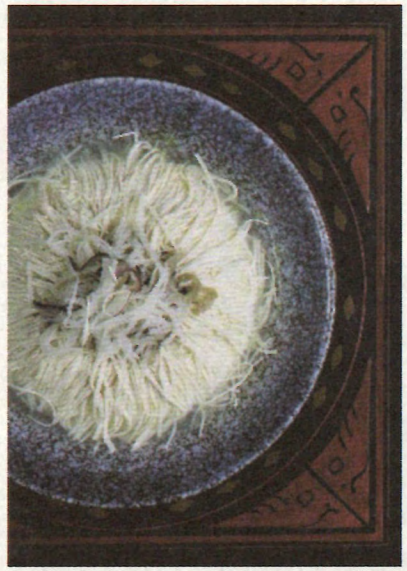
淮揚料理

／江南美食の芸術

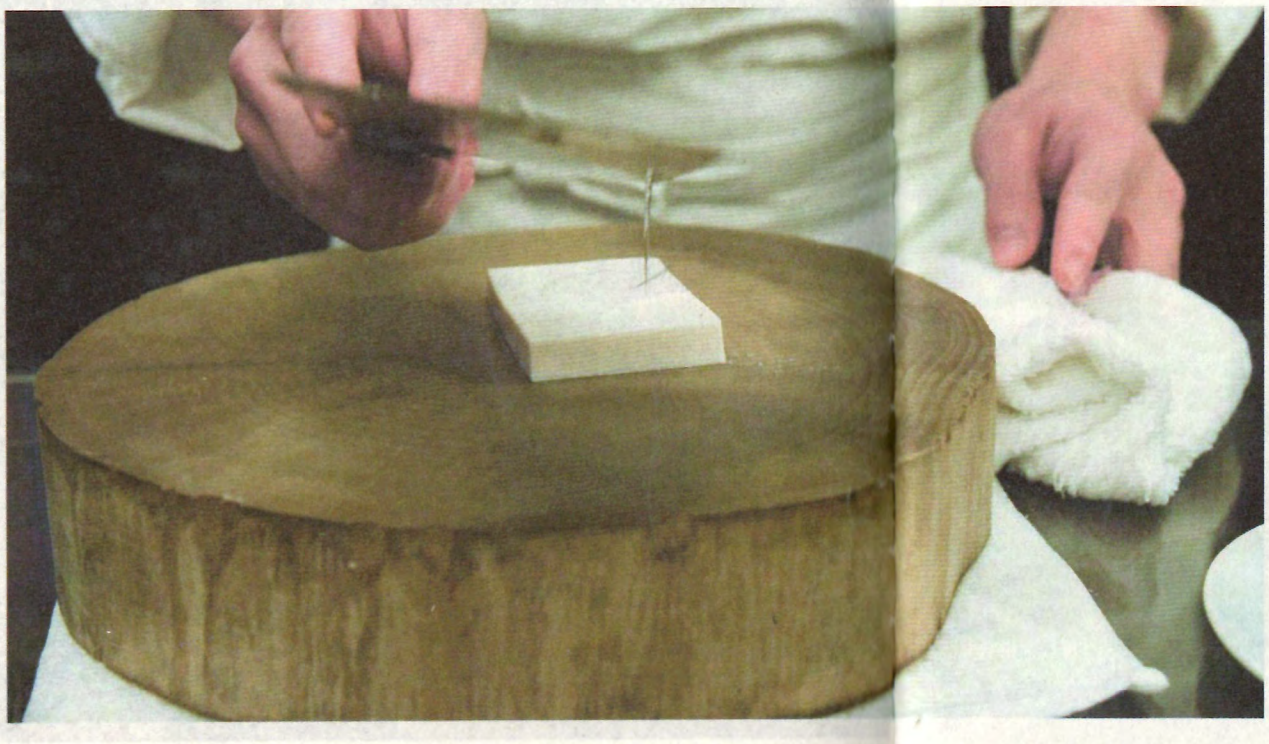
淮揚料理は中国の四大料理の一つであり、主に江蘇淮安、揚州にその源を持つ。江南地域は気候がよろしく、理想的な食材には事欠かない。したがって、淮揚料理自体の最も大きな特徴は、ごく普通の食材にほんのすこし彫琢を加え、美しい姿で登場させることである。食客に料理を提供するだけではなく、文化も伝えしようとする。精美な淮揚料理は人々の注目を集める同時に、人々の口を満足させる。淮揚料理は中国の無形文化遺産である、中国の国家的宴会の第一候補となっている。

◎淮揚料理に関する紹介

淮揚料理の食材の選択が厳密であり、季節に合った食材とその食材の新鮮さが求められる。「獅子頭」は淮揚料理の名物料理である。その作り方は季節の変化に伴って食材を変え、春季にはタケノコを煮込み、夏は魚のスープで味付けし、秋には新鮮なカニが使用され、冬には白菜によって「獅子頭」がまろやかな味になる。季節と食習慣の微妙な関係により、淮揚料理は伝統的な技術に基づいて自然に活気づく。



淮揚料理の美の追求は、出来上がった料理をお皿に載せるまで終わらない。シェフは包む、巻く、醸造、刻むという手法を組み合わせ、料理に一層芸術感を与える。皿の飾りも非常に重視し、料理の形や特徴に合わせて、中国文化の縁起の良いイメージと組み合わせ、「鶴よりの新年祝い」や「孔雀の羽広げ」など、目にも楽しい造形を試みる。



刀工と火工も淮揚料理の秘密である。淮揚料理のシェフは一丁の包丁で、さまざまな切り方を心得ている。普通の白色の干し豆腐なら、細い絹の糸と同じくらい薄く切る。これは「千し豆腐の千切り」といい、美味な料理の唯一のパスワードである。

◎鑑賞／中国の淮揚料理博物館

中国の淮揚料理博物館は淮安にある。淮安は淮揚料理の主要な起源地の一つとして、歴史ある飲食文化を持ち、淮揚料理の起源と発展を知る重要な窓口である。

博物館は四つの部分で構成される。河館、料理館、民俗館、学芸館である。「淮揚料理」を中心とし、それぞれ淮揚料理に関わる運河文化、淮揚料理文化、民俗文化、そして淮揚料理の味わいを学習した成果を紹介している。

ゆっくりした暮らしの前置き

／揚州のヤムチャ

古代文人は古くから江南に、とりわけ揚州に憧れた。揚子江がここを流れ、大運河がここを超え、加えて魅力的な瘦西湖もある。揚州の美は、詩や絵画のような風景のほかにで、おいしい食物がある。瘦西湖を知るには、まずは名高いヤムチャから始めましょう。揚州のヤムチャは飲むのではなく、「食べる」もので、その内容は豊富多彩であり、単純にお茶を飲むことではない。古い運河のそば、八仙卓、板製ベンチ、干し豆腐の煮込み、数個の三丁包、それに「緑揚春」というお茶を備え、ヤムチャは精致な儀式感でこの都市のゆっくりとした暮らしの幕を開く。

◎ヤムチャ

ヤムチャは揚州人のライフスタイルを映し、心の自在を以て、普通に料理を食べるだけでも面白い。簡単な食事もヤムチャによって一層緻密になり、その味で数代の揚州人を征服した。朝早起き、夜遅く帰る忙しい都市人も朝霞の詩意を味わえる。

三丁包

揚州ヤムチャの名物である。三丁とは、細く切った鶏、豚肉、タケノコを指すが、三丁はまた三鮮とも称し、三鮮が一体となっておいしい。白くて柔らかい饅頭はその中の美味しい味を吸い、甘じょっぱく、ころころとした歯ごたえである。

翡翠色のシュウマイ

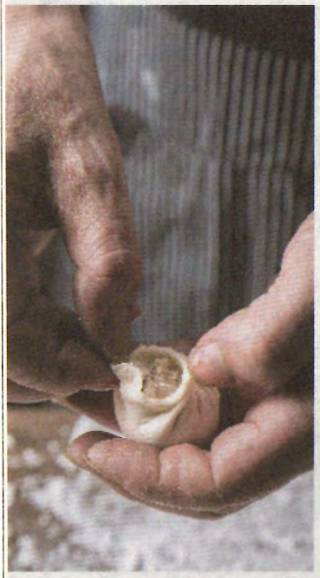
このシュウマイは表面がすっきりとしており、面皮が円形でレースの付いたような形状で、薄くて透明で、中の餡には細く切った野菜の葉を使っているよって、シュウマイ全体は翡翠色になる。シュウマイの頂部は小さな豚肉で飾られ、味が豊かで、歯ごたえがあり、おいしい。

千層油ケーキ

千層油ケーキは菱形で、半透明で、淡いピンク色である。そのケーキは64層であり、砂糖と油が入って、柔らかくておいしい。「油ケーキ」と言っても、全然油っぽくなく、さっぱりしており、ほのかな甘みが心に染み込む。

◎鑑賞／揚州茶社

ヤムチャ文化は長い歴史を持ち、茶社も全揚州にたくさんある。揚州における最も有名な茶社は老舗「揚州三春」で、即ち富春茶社、冶春茶社及び共和春茶社である。三春のなかでは富春、冶春が最も有名で、お菓子がそれぞれの特色を持っている。花園茶楼や六必居という茶社はそれほど有名ではないが、味が非常に正統的であるため、地元の人にも人気がある。



鎮江香酢／鎮江という都市の味

酸。その言葉だけで食欲が促され、唾液が口中に分泌される。江蘇人の「酸」味の記憶のなかで、酢の記憶は色褪せることはない。鎮江の人々は酢の味わいを好み、酢の醸造は習得が必須の技術である。単純な酢は食卓の「主役」を演じることはできないが、鎮江香肉、上海蟹と出会うことにより、上海蟹の寒さを取り除き、香肉の塩辛さと油っぽさを中和し、無数の美食の最適なパートナーとなる。

◎香酢に関する紹介

全中国で有名な香酢なら、この芳香が普通の家庭でも、全城のスナックバーでも、食欲をそそる魔力を有する。香酢は、鎮江という都市の味を表す。鎮江香酢の醸造方法は既に中国の無形文化遺産となり、中国他の地域の酢に比べ、鎮江香酢は酸味が柔らかく、江南の温かい気質に似て、包容力を備え、他の食材と結合する時、食材の味を最大限に豊かにし立体的にする。香味がまろやかで、瓶蓋を軽く開け、一口を飲み、その味が臓腑に染み渡ると、永久に忘れがたい味となる。

◎鑑賞／酢文化博物館

他の伝統的な博物館に比べ、酢文化博物館は酢の歴史を陳列するだけではなく、酢の歴史も展示している。それは本当の酢製造工場である。博物館内の古い仕事場を見ることによって、鎮江香酢の最も原始的な酢醸造芸を知ることができ、現場でオリジナル酢を味わえる。

陳列区には様々な酢の加工品が展示され、世界各地の酢や、恒順自製香酢及び様々味の酢飲料も含まれている。酒に似て、鎮江香酢にも時間の作用が働き、時間をおけばおくほど、その成分が変わり、一層健康に有益になる。また観光客は現場で自分の写真がラベルになる鎮江香酢を製造することができ、よいおみやげになる。

宿遷美酒

白酒を飲む都市の豪気

中国では、お酒はたんに飲み物であるだけでなく、一つの文化でもある。千百年来、英雄と美酒は切れない関係を有し、戦争のときは強い酒で喉の渇きを癒やし、攻城の折には取る三日間ぶっつづけで酒を飲み、四面楚歌に臨んで、酒を飲んで悲しく歌い、身を捨てて義を求める場合、酒で送別し、酒を飲まなければ、英雄も豪気が日減りするような感じがする。美味しい料理とお酒は後世まで伝わる英雄の伝説を生み出している。西楚覇王項羽の故郷である宿遷は「中国白酒の首都」の栄誉を授与すると同時に、豪気さとで偉大さとがつけ加わった。

◎美酒に関する紹介

中国白酒はいろいろあり、種類も多く、歴史の推移に伴い、各時代に好みの味が存在し、それによって新しい酒の種類が現れる。お酒は地域との変わらぬ関係を持つ。洋河酒と双溝酒は宿遷で最も有名な二類であり、その飲み口の柔らかさで著名である。このお酒は、甘くて、地元の人の好みに適する。

宿遷の酒醸造歴史は長く、4000数年前の竜山文化時期に遡ることができる。清朝の光緒年間、宿遷の洋河鎮及び周りの酒坊は数十軒もあり、多くの酒醸造職人がここに集い、美酒を醸造し、洋河鎮の酒醸造業が空前の繁栄を迎えた。

◎鑑賞／洋河酒醸造芸

洋河酒工場文化旅行区は千年の酒醸造の古鎮洋河にあり、美味しくて柔らかいお酒を味わえ、伝統的な古技法を体験し、職人の工夫した千年の精神に触れることができる。洋河の歴史と古代の蒸留所の醸造プロセスの美しさを再現する。

百年地下酒蔵

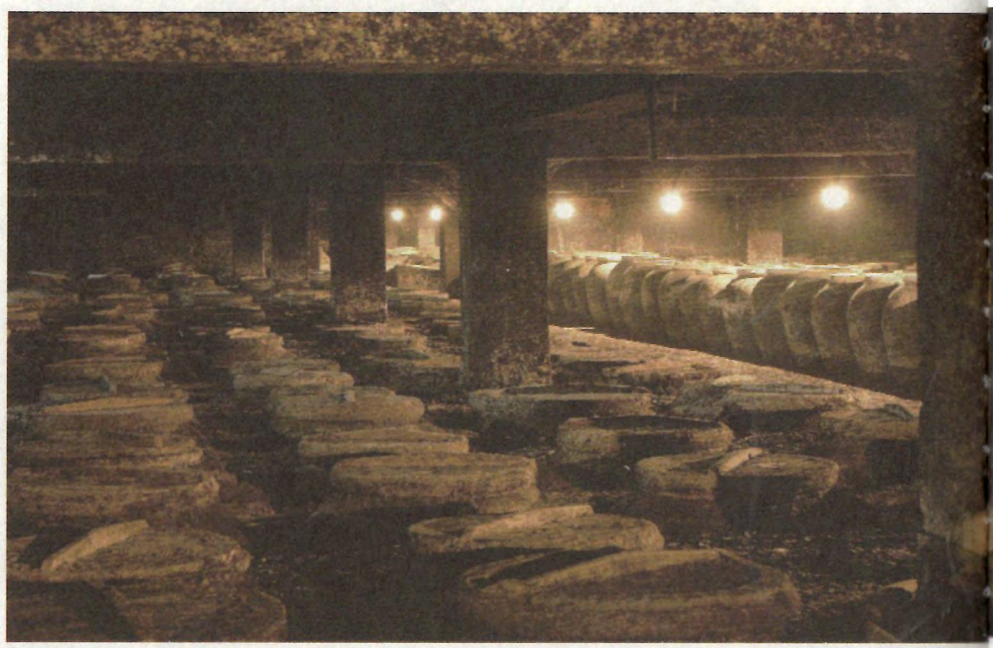
洋河酒工場内部の古い院落で、ある神秘の場所が隠されている。それは悠久の歴史を持つ「地下酒蔵」である。洋河酒工場の百年地下酒蔵は洋河酒文化の重要な印であり、ここに陳年白酒の濃厚な酒蔵風味があり、ひとつの時代の醸造文化と百年洋河の古い酒醸造歴史を現代に伝えている。

白酒金庫

白酒金庫は2011年に建てられ、倉庫内は恒温恒湿で、特徴的な陶器で酒を保存する基地である。

美人泉

名酒の産地には、必ずきれいな泉水がある。洋河酒工場地域内には美人泉があり、源泉の水は天然且つ神秘的で、常にきれいで、甘くて、柔らかく、干ばつや洪水があっても、一年中に常に水位を維持している。



◎第五章

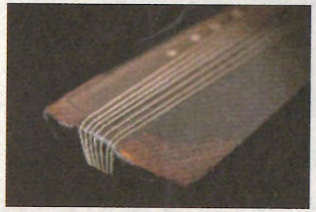
一日中の閑情風情

江蘇省の過去に還ると、音と光の最新技術がなくても、人々の生活は相変らず詩意に満ちている。「月と花を賞して曲を聞く」ことは、文芸家だけの専売特許ではなく、当時の人々はだれでも享受することができた。彼らの娯楽は芸術鑑賞や、芸術創作である。余暇の時に、自己修養のために古琴を引く。または昆曲の歌を聴き、美しく感動的な物語に夢中になる。あるいは活気のある揚州人形劇を見たり、冬のさなかに秦淮河に行ったりして、あざやかな灯籠の光によって新年の期待をライトアップする。

古琴を聴く

古琴、囲碁、書法、絵は中国古代文人の必ず習得する芸であり、「四芸」と称される。そのうち、「琴」は古琴を指し、「四芸」の一等を占める。古琴はまた「四弦琴」とも称され、中国の歴史の長きにわたり非常な重要な地位を占め、多くの流派が派生した。その大部分は江蘇に起源をもち、例えば南京の金陵琴派、蘇州の呉門派、揚州の広陵派、南通の梅庵派、常熟の虞由派などがある。古代の中国人は、単に音楽の演奏にとどまらず、瞑想、個人修養、友人間の感情的な交流のためにも古琴を演奏した。古琴芸術は西洋人にとって、東方の文化の象徴となってきた。

◎古琴に関する紹介／金陵琴派



2009年に、「古琴芸術・金陵琴派」は国連によって人類無形文化遺産の列に登録された。明後期から清朝初期の金陵派は、中国の古琴芸術の代表的で影響力のある重要な流派である。

江蘇省の他の古琴流派と比較し、金陵琴派は中国の南北のスタイルを組み合わせてユニークなスタイルを形成している。芸術的概念の観点から、金陵琴派は演奏者自身の統合的な育成を重視し、表現の観点からは、琴と音楽の共存を強調している。金陵琴派は明王朝の皇室楽官に由来するため、演奏技術に威厳があり、伝統的で、皇室の風格を表わし、ポーズと回転を強調する。

◎鑑賞／江蘇古琴芸術への鑑賞

古琴芸術が中国でますます好まれ重視されることに伴い、中国各地の特定の場所で演奏が鑑賞できるようになってきた。江蘇各地で異なる流派に応じ、それぞれ金陵古琴館、蘇州常熟古琴芸術館、揚州古琴一本道、鎮江梅庵派古琴芸術館が設立された。そのうち、「古琴芸術の故郷」と称される常熟は、古琴芸術館を通じて多くの古琴名家を紹介し、現代常熟の古琴芸術への伝承と保護を展示し、それに実物の形で古琴の制作プロセスを展示している。

昆曲を鑑賞する

昆曲、またの名を「昆劇」は、「百劇の祖」とも呼ばれ、14世紀の蘇州太倉に起源する。昆曲は蘇州の文化を要約するもののひとつであり、水の都市である当地の温かさと柔らかさを、豪華な曲で余すところなく伝えている。600年あまりの歴史を持つ昆曲は、終わりのない長いドラマのように、エレガントな衣装、旋律的なフルート、何度も変わるシーン、多くの個人的な心情の変化を通じ、その美しさを示している。『牡丹亭』は湯顕祖の代表作品であるだけでなく、中国劇史におけるロマン主義の傑出した発露でもあり、今でもひときわ輝いている。昆曲はまた、国連によって2001年に「人間の口述及び無形遺産の傑作」と評価されている。

◎昆曲に関する紹介／化粧の美しさ

昆曲の美しさは、歌い方、歌詞にあるだけではなく、その化粧にもある。登場人物は昆曲芸術で「行当」と称され、「生、旦、浄、醜」が昆曲の中で最も基本的な役柄であり、昆曲の化粧は役柄の違いに応じてそれぞれ異なり、化粧で人物の性格特徴及び精神の状態が示される。

「生」と「旦」のメイクは通常、白い下地にほんのり赤みを加え、パウダーを少々使い美肌効果を得る場合もある。メイクの手法には微妙な違いがあり、「旦」のキャラクターの眉と眼の間に塗る赤色は、ドライレッドかピンクの二種類に分けられる。「生」の武生というキャラクターは、英雄的な気概を表現するため、眉と額の間に赤みを帯びた小さな三角形を描く。

◎鑑賞／中国昆曲博物館

中国昆曲博物館は、かつては全晋会館と言われ清の時代に中国の山西商人が資金を集めてこの集会所を建設した。ゴージャスで洗練された建築スタイルは、中国の古代建築の本質を反映しているだけでなく、音響原理を巧みに使用して、ビーム周辺の残音の音響効果を生み出している。毎週日曜日の午後2時に蘇州の専業劇団が1時間のパフォーマンスを行い、「牡丹亭」、「状元媒」、「金玉奴」などの伝統的な芝生がここで上演される。袖口についている長い白絹及び衣服を通して、昆曲に人々が夢中になり、江南の雰囲気と柔らかい言語を表現している。

揚州の人形劇を鑑賞する

中国の唐王朝のころより、揚州にはすでに人形劇が生まれ、中国宋代に揚州の人形劇が有名になってきた。この人形劇は非常に表現力豊かで、パフォーマンス効果が鮮やかで国内外に名を轟かせている。この人形を操るには非常に高い専門性が要求される。同時に、人形に精緻な造形を施し、「人」と「人形」とが同じ舞台で演奏される芝生芸術は、無数の観衆に好まれ、中国の無形文化遺産にも登録されている。

◎人形に関する紹介／「命」のある杖頭人形

杖頭人形は、三本の木棒で操作される。「三本棒」と俗称される。そのうち一本は人形の頭部を支え、主棒又は顔棒と呼ばれる。人形の耳、目、鼻、口はいずれも開閉可能で、目玉は回転し、首は上下左右に動かすことできる。残りの二本の木棒の役割は、人形の両手を操縦することである。熟練したパフォーマーは、人形の手でお茶を淹れ、かつ一滴も溢さないような難しい芸当さえもできる。

人形は実在の人物ではないが、実在の人物のように真に迫っている。それぞれのキャラクターには独自の気質と物語があり、木棒と紐を通して、パフォーマーは人形に命を与え、生き生きとした感動的なパフォーマンスを披露する。

◎鑑賞／痩西湖内の揚州人形劇

痩西湖内の「水雲勝概」は昔の中国清朝時期の「揚州二十四の風景」の一である。「大桂花庁」の外に柳があり、五亭橋、白塔、小金山と共に、一番美しい絵を構成している。「大桂花庁」内に揚州人形芸術館と設立され、訪れる観光客にこの特徴的で興味深い無形文化遺産を展示している。室内の静かな劇場で、音楽のリズムにのって、パフォーマーの手の中の人形は自分の感情を持ち、命のあるように振る舞う。

秦淮飾り提灯を鑑賞する

春節は、中国人にとって一番重要な祝日であり、昔の南京人にとって飾り提灯は、西洋の人びとにとってのクリスマスツリーのような意味合いを持っていた。飾り提灯のよそおいによって、都市全体の春節の雰囲気はいよいよ最高潮を迎える。祝日のために生まれた秦淮飾り提灯は、中国の無形文化遺産に指定されている。このようなシンプルだが温かい小さな物は、南京の人々の子供時代の楽しい思い出になり、街の人々に静かに、新しい年が始まることを伝えている。

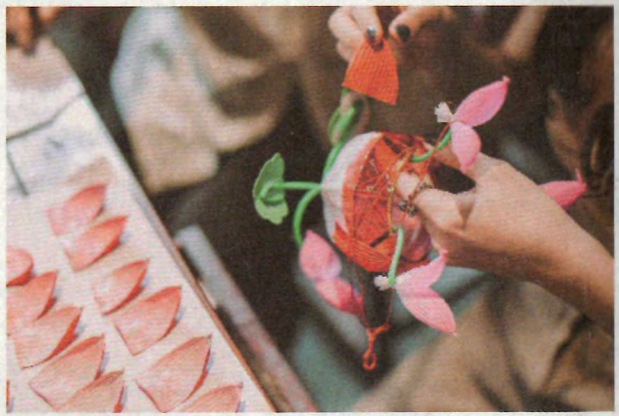
◎飾り提灯に関する紹介／指先の繁華

秦淮飾り提灯は我が国の伝統的な飾り提灯芸術の重要な流派であり、南京で最も代表的な民俗芸術の1つでもある。伝説によると、明王朝の朱元章は、正月15日に飾り提灯の祭りを開催することを提唱した。秦淮飾り提灯は一挙に有名になり、「秦淮飾り提灯が一番だ」という評判を得た。

芸術は伝統的な民俗芸術より起源し、秦淮飾り提灯の豊かなバリエーションは提灯作製職人の日常生活からの霊感に由来し、神話伝説、動物と歴史的な逸話は、飾り提灯の題材となる。飾り提灯の製作は非常に複雑で、最も古典的でコンパクトなのはロータスの飾り提灯である。花びらを制作するためだけに、紙の切断、染色、湿潤、研磨、及び花びらの貼付、最終成形といったプロセスが必要となる。

◎鑑賞／秦淮飾り提灯の祭り、都市で一番温かいライト

毎年の春節は、南京で秦淮飾り提灯の祭りが開催され、一年のうちで飾り提灯を楽しむのに最も適した時期である。この時期の夫子廟、老門東一帯に飾り提灯が多く、人もたくさん集まる。人々は深まる寒さをものともせず、夜が更けるのを待って、船に乗って、ゆっくりと消える秦淮河のライトの光を見て、そして秦淮河の風情を体験する。現代の人々の好みに応えるために、飾り提灯制作の達人はまた、ゾディアックライト及び音光提灯を生産している。



提灯制作芸術について学びたい場合は、南京民俗博物館（甘家大院）に来てください。提灯芸術家が、提灯の作成過程を展示し、巧みな手技によってたくさんの提灯をみなさんの指先で咲かせる。

◎第六章

先祖からの贈り物

江蘇省の長い歴史と文明によって、この土地の人々は自然と共存する知恵を継承することが可能になった。彼らは文明の記憶を追求し、歴史の中で探索し、歳月に埋もれる文化の跡を掘り起こす。刺繍、紫の砂、切り紙細工や藍染めの布などの江蘇文明のイメージは、すべて先祖の文化的記憶と結び付いている。人々は自然からインスピレーションを引き出し、感情を注ぎ、知恵と美に満ちた工芸品を作る。無形文化遺産は江蘇省の人々の感情的な表現と美しさへの追求であり、生命の栄光を反映している。

衣装が華やかで美しい

中国人の装飾の記憶は、先史時代の文明に遡ることができる。美を追求する人間の天性は、装飾芸術を絶えず新たな高みへと押しやる。美しい装飾により、中国の衣装は東洋の優雅さに満ちあふれる。

南京雲錦

中国の古代絹織物の中で、「錦」は最高芸術レベルの織物であり、最も高価な錦は雲錦である。「雲錦」という言葉は、中国の清朝にまで遡る。細かい織りのおかげで、色彩とパターンが華やかで、雲のようにきれいで、「雲錦」と呼ばれている。雲錦の製織工程は非常に複雑で、1日に5～6センチしか織ることができず、機械で人力を置き換えることができないため、南京雲錦は世界で「雲錦の1インチが金の1インチ」と称される。元、明、清の王朝では、雲錦はいずれも王室専用のものであり、中国の絹織物の最高の業績を表し、国連によって人間の無形文化遺産に認められている。

◎南京雲錦博物館

南京雲錦博物館は中国で唯一の雲錦専門博物館であり、主に南京雲錦を代表とする中国民族織錦芸術を展示する。館内では雲錦の織造工芸、明清雲錦精品実物及び中国少数民族織錦などを展示している。館内には古い織機も陳列されている。ジャカード織りの職人は上と下の二人で連携し、千年前の雲錦織造における特殊なエンボス加工とモザイクを施した。これは中国の伝統文化の美的領域と文化的魅力を反映している。

蘇州刺繍

蘇州刺繍は、蘇州の呉江地域に起源を有し、中国の伝統的な有名刺繍の始まりとされる。この作業に従事するのは女子が多いので、親しみを込めて「繍娘」と呼ばれる。針に導かれて銀の針が飛び交い、シルクが踊るようにはためき、ラインの優雅な輪郭とカラフルな色の解釈を通して、すばらしい刺繍がシルクに浮かび上がる。

時間と共にすがたを変えながら、蘇州刺繍は絶えず変化発展し、単線の輪郭から美しい装飾、片面刺繍から両面刺繍にまでに発展した。優秀な職人は卓越した技術によって、蘇州刺繍に現代のデッサン的な効果を取り入れることができる。

◎蘇州刺繍博物館

蘇州刺繍博物館は著名な園林環秀山荘に連接し、展示館全体は以下のように分けかれている。「古代刺繍品室」、「明清刺繍品室」、「近代刺繍品室」などである。数百の珍しい刺繍品は、蘇州刺繍の発展歴史を余すところなく展示している。

伝統的な蘇州刺繍作品の鑑賞以外に、近現代の工芸職人による蘇州刺繍の刷新を鑑賞することができる。西洋画と初めて融合した「シミュレーション刺繍」作品の『イエス像』、及び中国の伝統的書法と墨絵とを結合して刺繍した『太白酔酒』も鑑賞できる。無数の職人は蘇州刺繍に新たな生命力を注ぎ入れている。

南通の藍染め布

春秋時代と戦国時代に、中国では民間に藍染めの先例があった。それは汚れや摩擦によく耐え、パターンがシンプルであったことから民衆に好まれ、布団、シーツ、衣類、バッグ、スカーフキルトなどの日用品を作るのによく使われた。深い青やまっさらな白は、ブロケードのようなまばゆさはないが、江南の女性の穏やかで静かな気質に最も適している。質朴なスタイルは、身体の浮薄なところを打ち消している。その模様が示唆する文化的含意は深遠である。ドラゴンとフェニックスが吉祥を意味し、または松と鶴が描かれ、伝統的な中国文化と芸術的意味合いを反映している。

◎南通の藍染め布の博物館

南通の藍染め布の博物館には明清以後の実物及び写真資料1万数件が収蔵されており、優れた民俗製品が大量に保管されている。一番大きな特色はここで藍染め布の制作プロセスを鑑賞でき、裁断、染色、スクラッチなどの伝統的な工程を鑑賞できる。各色の藍染め布芸術の工芸品を鑑賞する以外に、自分で好きな布を選んで服やカバンなどを製造し、或いは自分でパターン作り、染色、晒しなどを行い、自分だけの藍染め布を製造することもできる。

烏髪の間の様々な風情

古代の江蘇女子の美しさは、きれいな服だけではなく、髪にもある。髪は古代女子の感情の宿る場所であり、中国古代の女子の心中にあって非常に重要な地位を占める。古代の女子の髪飾りは多様であり、簪、かんざし、鳳凰の形をした冠、篦などが挙げられる。

常州の櫛

櫛は中国の伝統的工芸品であり、歯が少ないのが「櫛」で、歯が多いのが「すき櫛」と称される。常州櫛は江蘇常州市の独特な伝統的工芸品であり、長い歴史を持ち、その制作プロセスは中国明朝にすでに相当に高いレベルに達し、生産される櫛は宮廷用品として選ばれ、「宮櫛名櫛」と呼ばれた。常州の櫛が有名である理由は、その材料選択が厳しく、製造プロセスが独特で、出来栄えがきれいだからである。すき櫛と櫛は原料から仕上げ品まで、それぞれ約72と28のプロセスを経て初めて完成する。古代、櫛は人々が必ず持っているものであり、特に女性はどこへ行くにも櫛を携帯し、多くの古代女性は常に美しいすき櫛を髷にさして飾りとした。

◎篦箕巷

常州の篦箕巷は大運河に隣接し、それは櫛で有名となった。古くから、この巷に住む人は櫛の制作で生計を立てた。夜になると、店先に提灯がぶら下がり、作業場がライトで照らされる。キラキラと輝く光が運河の水に反射し、文亭橋から見やるとまるで金龍のように見える。この魅力的なシーンは「ビームの光」と呼ばれる。現在、百年老舗「穿月楼」は常州でよく知られていて、観光客は木材から櫛までの制作プロセスを体験することができ、自分又は家族のための櫛を作製することができる。

南京の絨花

絨花は南京の伝統的な手工芸品であり、伝統的な中国の天然シルクで作られ、黄銅を骨組とし、絹は職人のペンチで花に曲げられ、色が鮮やかで、小さくてきれいである。南京の絨花は、中国の唐時代から流行し、清朝の時に「宮花」となった。皇室の女性に好まれる頭部の飾りものであり、造形が写実的で、本当の花によく似ている。絨花は漢語で「栄華」と同音語であり、吉祥祝福の意味を有する。古くから民間で歓迎され、大規模な「花市大街」で集中的に南京絨花が販売される。絨花で装飾する習俗はすでに深く根を下ろしている。

◎南京市民俗博物館

「絨花坊」は南京甘家大院内の南京市民俗博物館内に位置し、無形文化遺産の古くて珍しい継承工芸を間近で鑑賞することができる。絨花の制作は複雑で、絹の煮込み、染色、裁断、組み合わせ造形などのプロセスを経る。したがって、市場にはめったに出回らない。現在、絨花の職人は絶えず技術を発展させ、現代人の審美眼に一層一致し、かつての赤色と緑色に比べ、一層清新かつ優雅となった。もともとは頭部の飾りものから、徐々にコサージュ、室内装飾まで及び、さらにイタリアの手作業帽子と結合することで、古く且つ新たな状態でその技術を全世界に見せる。

生活を彩る美しい器物

古くから今に至るまで、快適な生活環境は、すべての人々の共通の目標である。新年にお祝いの切り絵を貼り、余暇にお茶を一杯作り、ドラゴンボートフェスティバルでは平和を祈るために香包を縫って家に掛ける。この無形文化遺産、人々の暮らしを飾り、普通の暮らしをカラフルにする。

切り紙細工

切り紙細工は中国で最も伝統的な民俗芸術である。このような透かし彫りの芸術は、人々に視覚的、芸術的な楽しさを与える。江蘇省の切り紙細工は千年の歴史を持ち、主に揚州、南京、常州、南通、徐州に分布しており、特に揚州の切り紙細工と南京の切り紙細工は最も長い歴史と最も大きな影響力を持っている。過去には、揚州の人々は立春の時期に切り紙細工をし、暮らしの美化を飾ったり、お祭りに用いたりした。揚州の切り紙細工はラインが滑らかで、構成が精巧で、技術が革新的であり、中国南部の民俗の切り紙細工芸術の一つの代表である。

◎「揚州４８６」無形文化遺産の集まる区域

「揚州４８６」では、無形文化遺産を中心に、揚州という都市の文化記憶を集める。「４８６」という数字は、紀元前４８６年に、呉王夫差はここに塹壕を設けた。その年は揚州大運河文化の始まりであるだけでなく、揚州伝統文化の節目でもある。切り紙細工芸術も「揚州４８６」で最大限に展示され、ここで切り絵の中国巨匠の多くの素晴らしい作品を鑑賞することができる。そのラインは均一で、繊細で柔らかく、動物の表情は生き生きとし、毛髪さえも表現されている。

◎中国宜興陶磁器博物館

無錫宜興は風景がきれいで、森や竹があるだけでなく、陶器の産地としても有名で、長い歴史を持つ陶器生産都市である。宜興陶磁器博物館は中国で最も早い時期に設立された専門的な陶磁器博物館である。さまざまなコレクションを通じて、宜興は陶器とすばらしい陶磁器文化の長い歴史を持っていることがわかる。無数の職人のめずらしい芸術品には、数世代の人民の偉大な創造と知恵が凝集しており、また地元の文化に光を投げかけるものでもある。

無錫紫砂壺

中国人は古くからお茶を飲むことが好きで、お茶を入れる器具も重視し、紫砂壺でお茶を入れると、お茶の香りを奪うことなく、長時間にわたって茶葉の色、香り、味を保持することができる。紫砂壺と言えば江蘇省の無錫市の宜興紫砂壺が一番有名で、千百年以来、絶えず大衆に好まれ、歴代文人はお茶を飲む同時に、陶芸家と一緒に紫砂壺に詩と絵を書き、芸術性と実用性の完璧な組み合わせを作った。紫砂壺を作る過程でわずかな間違いが生じれば、陶芸家はポットを破壊して再制作することとなる。紫砂は意味が奥深く、仕様上の制限がなく、想像力と創造性を最大限に活用できるため、紫砂壺には独自の色とカラフルな色が付いている。

徐州馬荘香包

香包は、中国古代の伝統的な飾り物で、歴史資料によれば、中国の漢王朝の未成年の男性と女性は香包を着る習慣があると記録されている。漢民族の出生地として、徐州の香包の職人技はユニークで、シンプルなスタイルで、図案が美しく、装飾的で実用的である。香包にはよく漢方薬が含まれ、蚊を寄せ付けず、風邪を予防し、心を落ち着かせる効果を持つ。伝統的な徐州馬荘香包は、最も古い生産技術を使っている。香包の中央にプラスチック板があり、両面は糸くずに包まれた漢方薬である。機械では縫製ができないので、古代のように職人によって手で縫製しなければならない。

◎馬荘香包の文化的意味

徐州の香包は独特の形をしており、高級なサテン生地で作られており、縁起良くするために赤が使用されることが多い。香包に刺繍されるパターンは豊富で、色は明るく、美しいものを意味し、明確な民族的特徴を持ち、古代中国の美しい文化に従っている。時代の発展に伴い、香包は形が豊富で、ハート形、ダイヤモンド形、蝶形、キャラクター人形などのさまざまな形がある。香包のテーマもそれに伴って変わり、オペラのマスク、布袋和尚、両漢文化、漫画人形の内容を表現する作品もある。

後書き

時間は江蘇人の過去の衣食住行を変えるが、その古跡、古い民俗、伝統的な手作業工芸品は、依然として人々の尽きせぬ知恵を示し、常に新しくエキサイティングなものを創造する。これらのカラフルで貴重な江蘇省の人文資源に、私たちは将来に会うことになるでしょう。

ご覧いただきありがとうございます！

水韻江蘇
Jiangsu: A Wonderful Experience in Beautiful China